

北海道駒ヶ岳の火山活動解説資料（令和6年2月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

山頂火口原浅部の活動がやや活発化していますので、今後の火山活動の推移には注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1-①～③、図2～4）

山麓に設置した監視カメラで、5日に昭和4年火口のごく弱い噴気が火口縁上10mまで上がるのを観測しました。山頂に設置した監視カメラによると、2021年頃からごく弱い噴気を観測する日数が増加する傾向が認められています。

そのほかの火口の噴気活動は引き続き低調な状態です。

・地震及び微動の発生状況（図1-④～⑥、図5～6）

2023年12月以降継続的に発生していた山頂火口原浅部（主に深さ1km付近）を震源とする振幅の小さな火山性地震は、1月下旬以降やや少なくなり2月の合計の地震回数は17回でした。また、低周波地震が発生する割合が低下しており、20～24日には深さ0km付近で一時的に山頂の剣ヶ峯東観測点で観測される高周波地震が発生しました。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図7）

GNSS連続観測では、2022年頃から山頂火口原浅部の膨張を示すと考えられるわずかな変化が一部の基線で認められています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び北海道のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』、『数値地図25000（行政界・海岸線）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

今回の火山活動解説資料（令和6年3月分）は令和6年4月8日に発表する予定です。

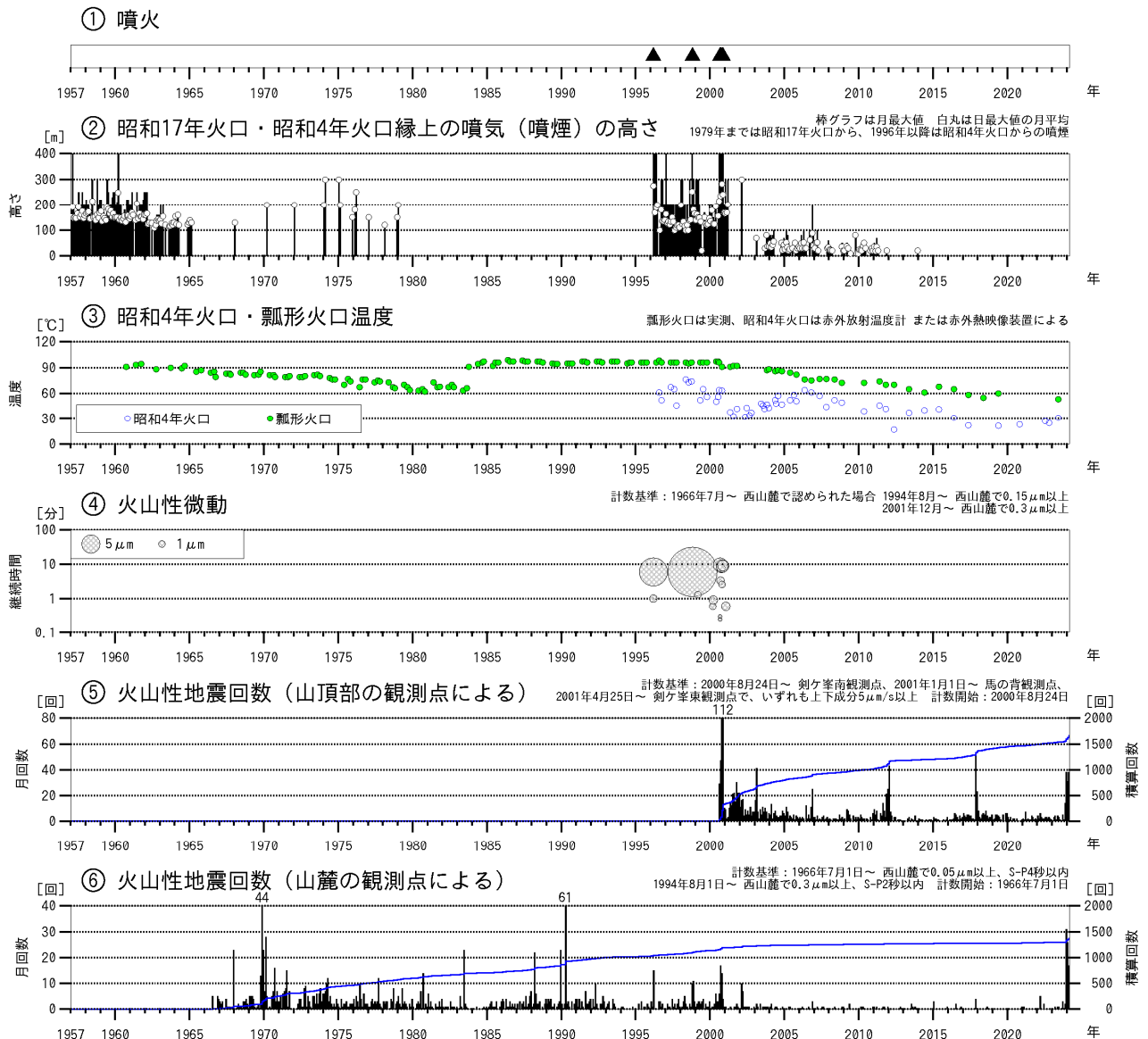


図1 北海道駒ヶ岳 火山活動経過図（1957年1月～2024年2月）
各火口の位置は図9を参照してください。

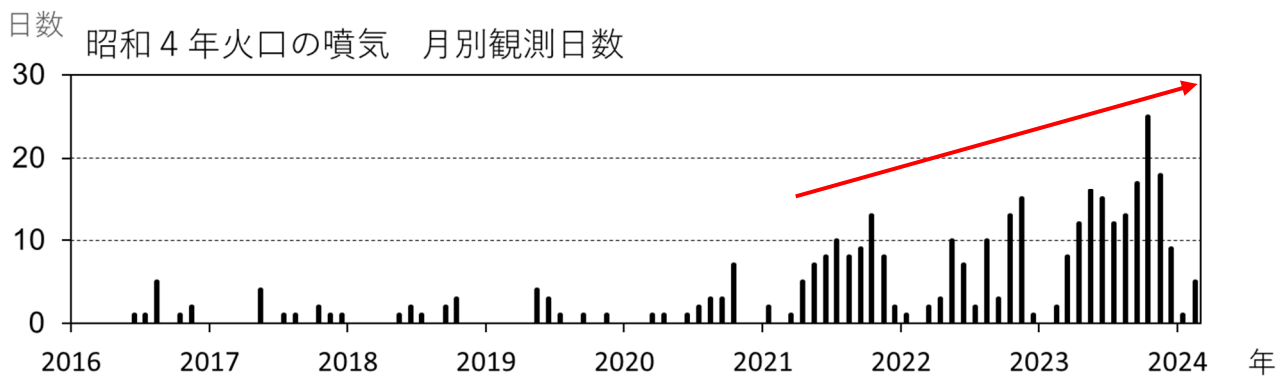


図2 北海道駒ヶ岳 昭和4年火口のごく弱い噴気を観測した日数（2016年1月～2024年2月）
山頂部に設置した剣ヶ峯監視カメラ（位置は図9参照）による観測結果です。
冬季は雪氷付着のため欠測日が多くなる傾向があります。



図3 北海道駒ヶ岳 南東側から見た山頂火口原の状況（鹿部公園南東監視カメラによる）



図4 北海道駒ヶ岳 南西側から見た昭和4年火口付近の状況（剣ヶ峰監視カメラによる）

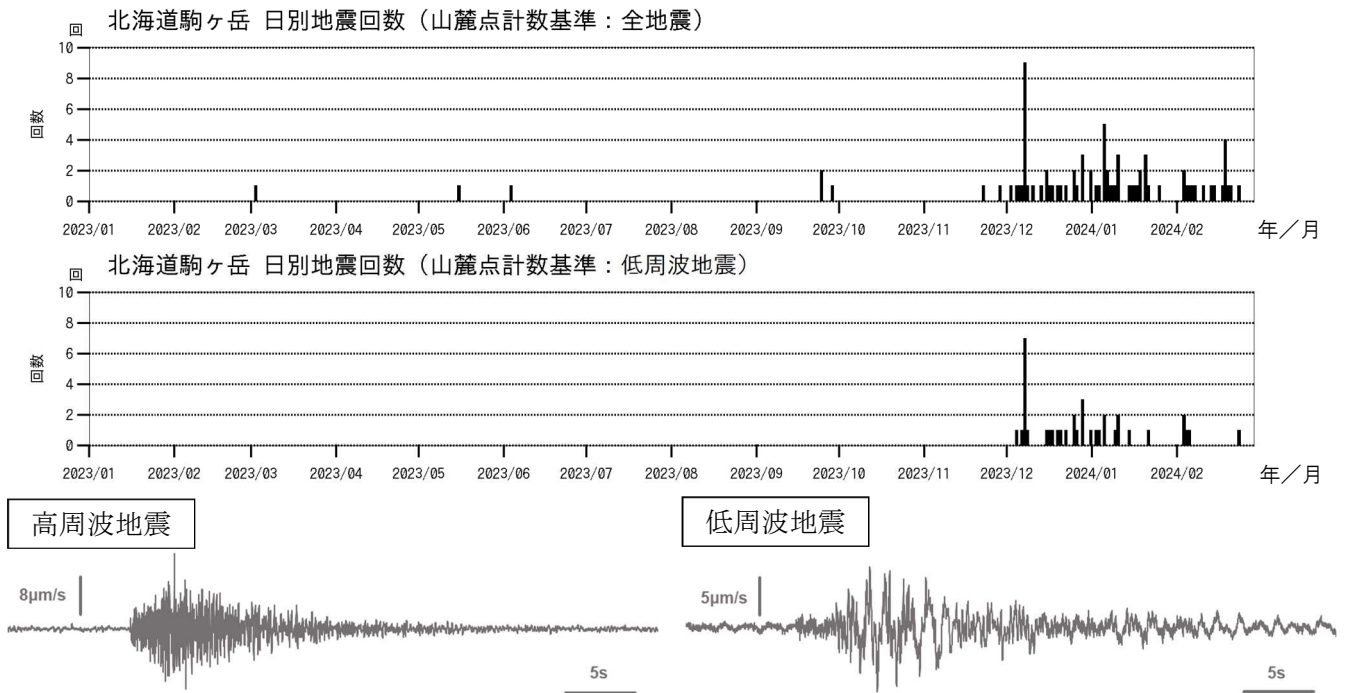


図5 北海道駒ヶ岳 日別地震回数（上段：全地震 下段：低周波地震 2023年1月～2024年2月）及び火山性地震の波形例（左下：高周波地震 右下：低周波地震）

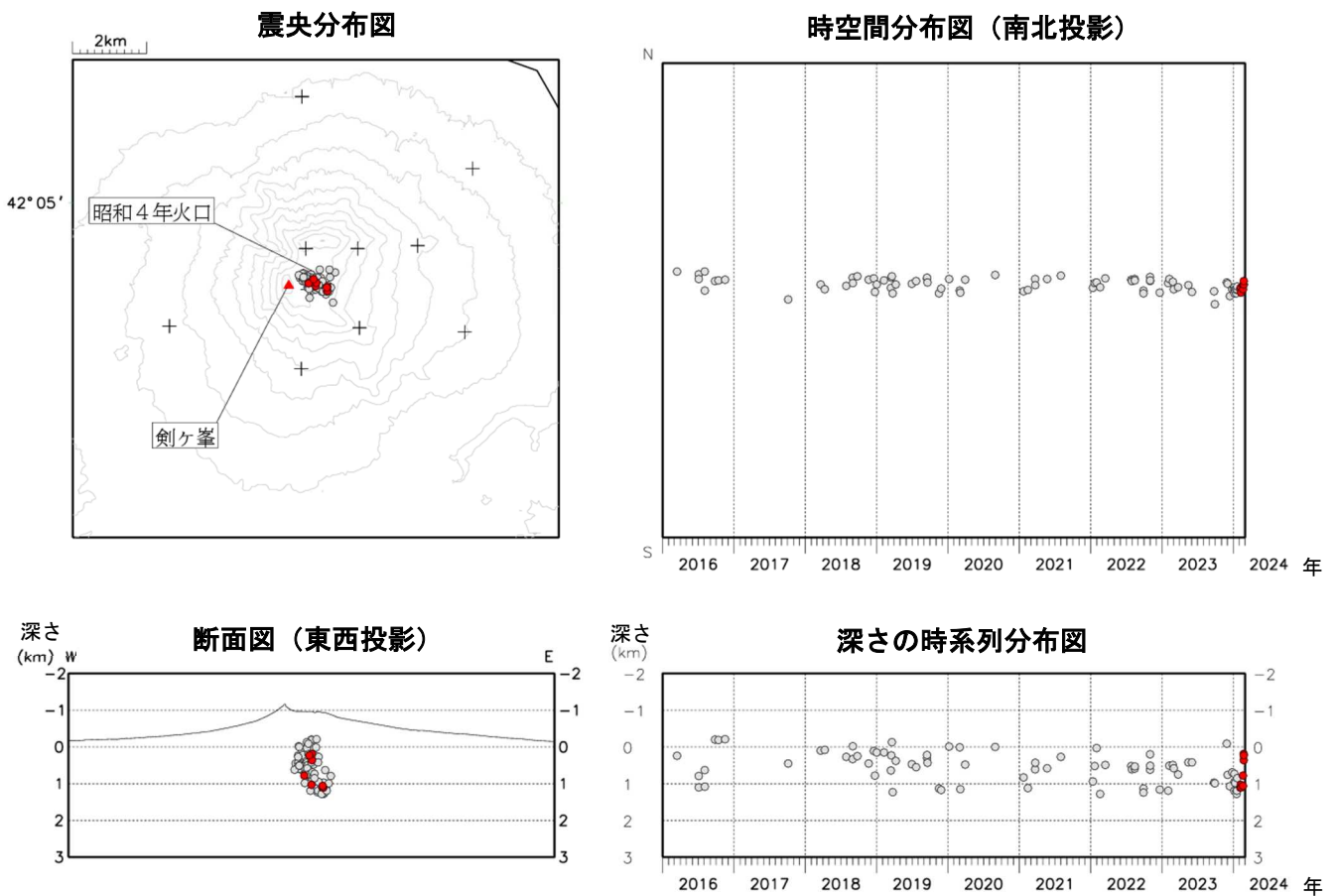


図6 北海道駒ヶ岳 火山性地震の震源分布（2016年1月～2024年2月）

●：2016年1月～2024年1月の震源 ●：2024年2月の震源 +：地震観測点

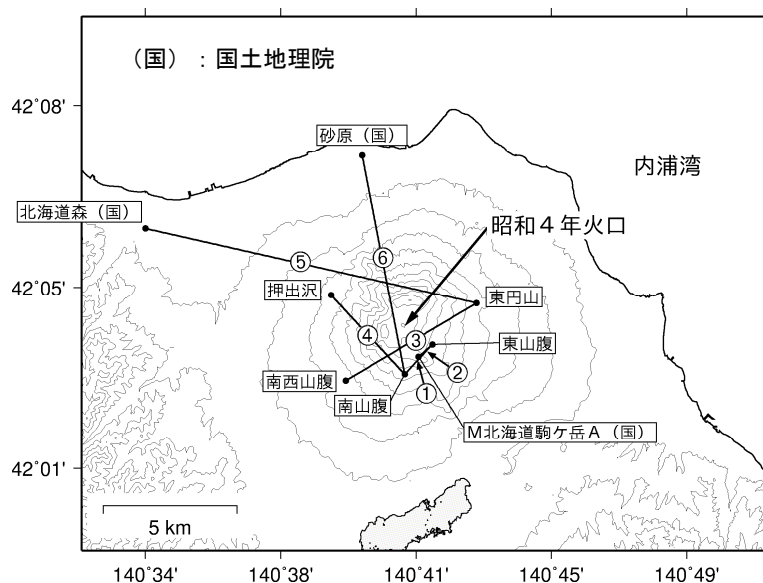
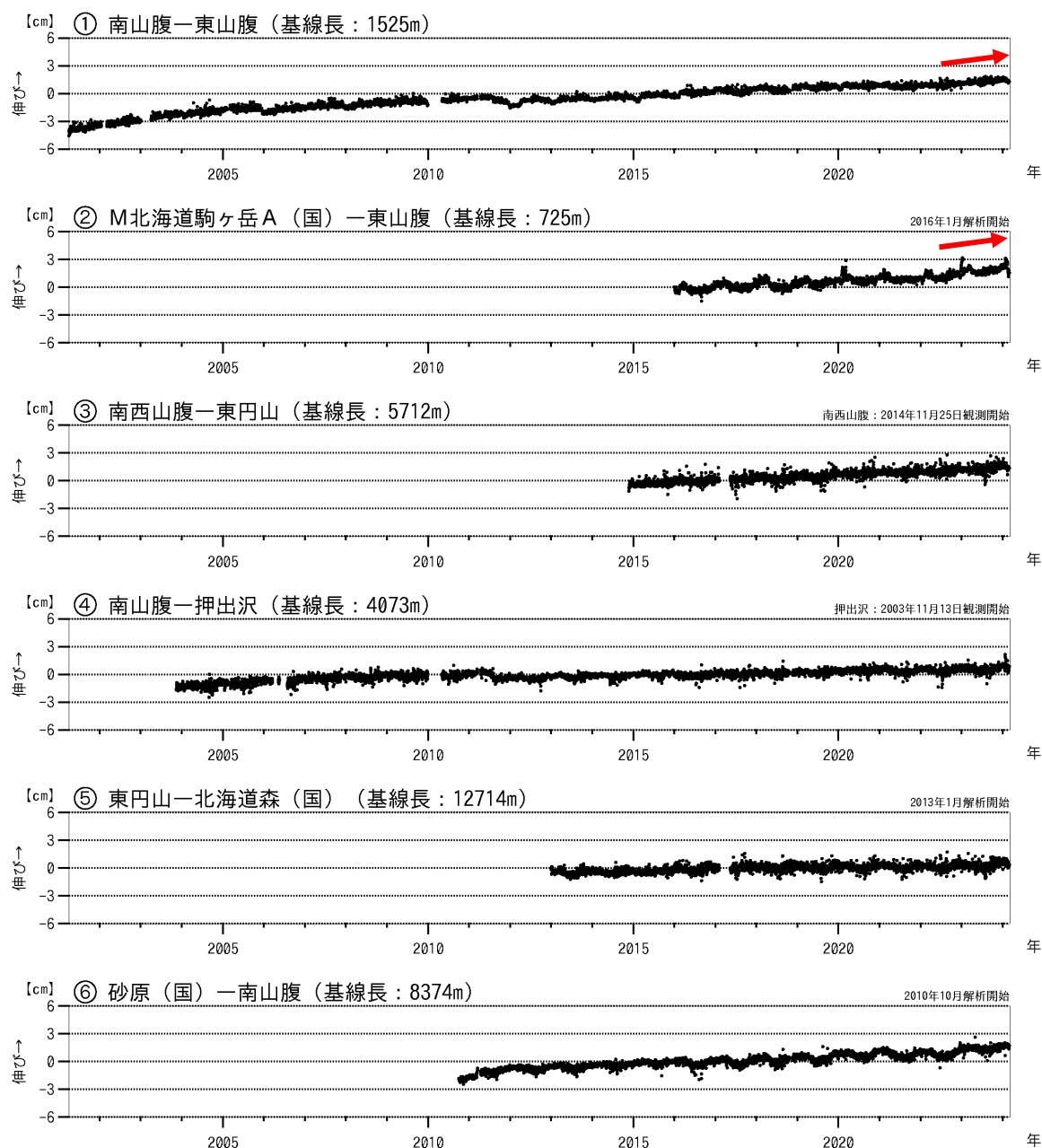


図7 北海道駒ヶ岳 GNSS連続観測による基線長変化(2001年4月～2024年2月)及び観測点配置図

グラフ①～⑥は観測点配置図の基線①～⑥に対応しています。
グラフの空白部分は欠測を示します。

- ・2022年頃から山頂部の一部基線でわずかな伸長（赤矢印）が見られています

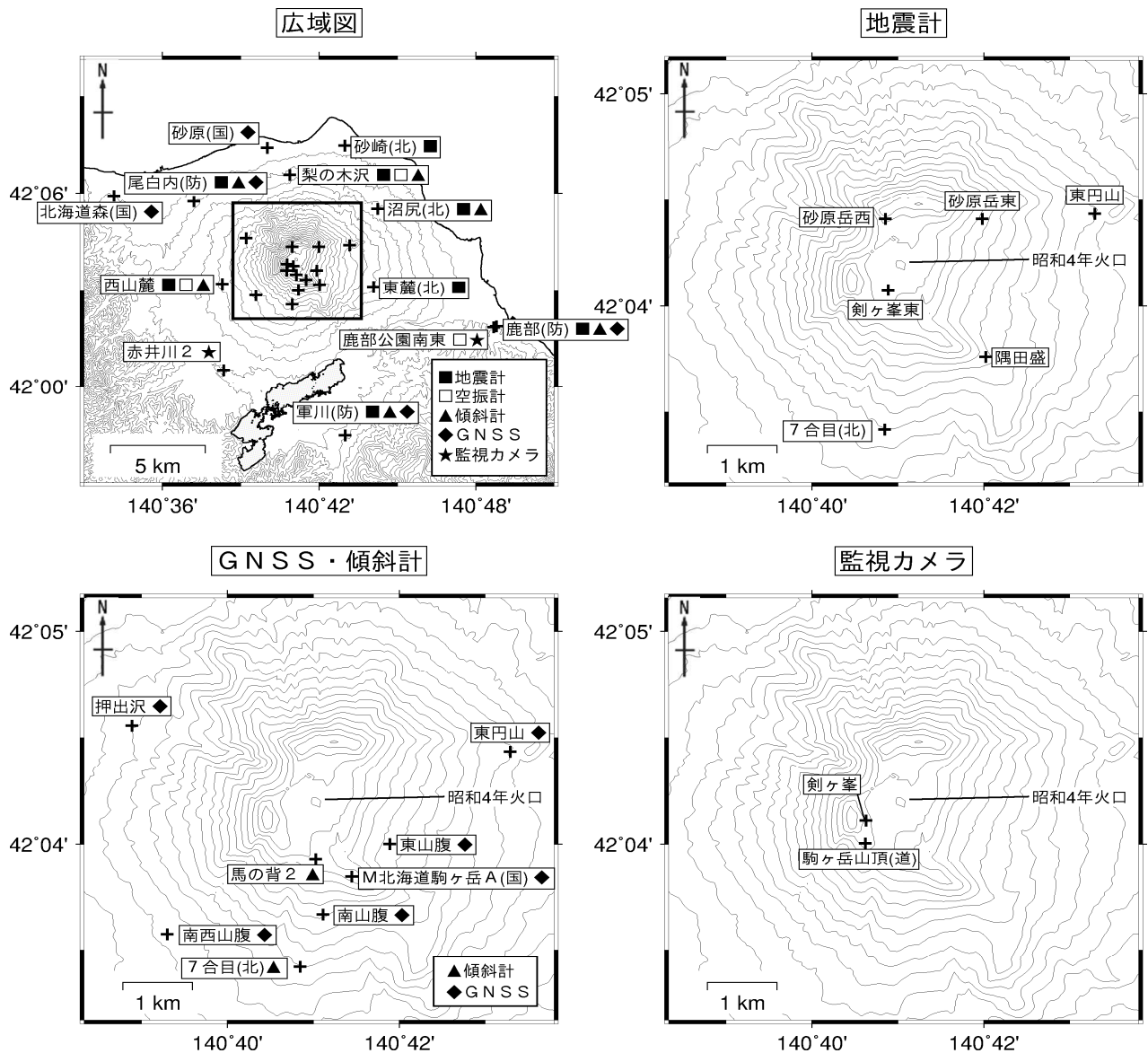


図8 北海道駒ヶ岳 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の太枠線で囲まれた領域を拡大したものです。+印は観測点の位置を示します。気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

(国)：国土地理院 (北)：北海道大学 (道)：北海道
(防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所



図9 北海道駒ヶ岳 山頂火口原周辺図